

キャリア教育の視点を活かした教育活動の実現に向けて ～学校組織の在り方と職員の意識～

U17C214B 高橋 健

はじめに

キャリア教育は将来激変する社会を自分らしく生きていくために、児童に基礎的・汎用的能力を身につけ自らの人生を切り開いていく、「生き方教育」ということができる。近年、学習指導要領をはじめとし、様々な教育の場においてキャリア教育の重要性が論じられている。

在籍校における学校経営方針では、キャリア教育における、基礎的・汎用的能力を児童に身につけさせることを各教育活動において意図的にねらい、児童のキャリア発達を図ることを「教育活動にキャリア教育の視点を活かす」としている。また、そのことによって児童の「学ぶ目的意識」や「学び続ける」意欲を高めていくことにつながっていくことを目指している。

1. 在籍校におけるキャリア教育推進の課題

1) 学校評価組織から見る課題

在籍校の教育評価組織は、学校評価推進委員会を中心に、学力向上委員会、心の教育推進委員会、特別支援教育推進委員会、健康体力推進委員会の4つの特設委員会できり立っている。

今までの教育ビジョン作成の過程で、キャリア教育を中心に据え、各推進委員会の取組にキャリア教育の視点を活かすことを共通理解はしていた。しかし、キャリア教育を通した目指す子どもの姿が明確ではなかったため、各推進委員会の取組の方向性がそろわない現状であった。

さらに、教育ビジョンを受け、各種教育全体計画において、そのねらいや目指す子どもの姿にキャリア教育の視点が活かされているものは多くはない。

その結果、各学級の教育活動がキャリア教育を意識した取組へとつながっていかないことから、目標の連鎖がすべての教育活動に至るまで成立していないことが一つの課題といえる。

2) 職員の意識に見られる課題

キャリア教育に対する職員の意識に関わる課題を

探るため、アンケート調査を行った。

(平成29年5月実施 回答者33名)

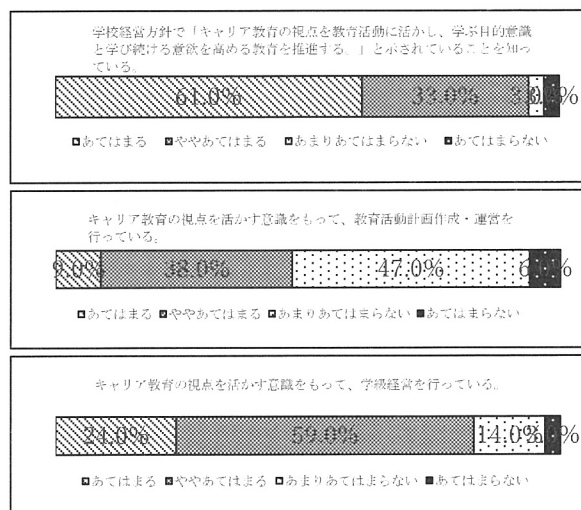


図1 キャリア教育意識調査の結果

結果を見ると、「教育理念の共有」はほぼできているといってもよい。しかし、「計画」から「実践」では、キャリア教育の視点を活かそうとする意識が下がっていく傾向にあることが分かった。

教育理念の共有はできている、意図的に教育活動を計画・実践しようとする意識が職員によって個人差があることがもう一つの課題であるといえる。

以上のことから在籍校においてキャリア教育の視点を活かした教育活動の実現に向けた課題を以下の2点と捉えた。

- ①キャリア教育を推進するための組織体制の構築
- ②キャリア教育に対する職員の意識の向上

2. キャリア教育推進のための組織体制の構築に向けた取り組み

- ・キャリア教育を担い、視点を促すための組織体制の構築
 - ・キャリア教育を通した、目指す子どもの姿の明確化
 - ・教育ビジョンによるキャリア教育の体系的な推進
- 以上の3点の実現に向けて、以下の取組を行った。

1) 学校評価体制の改善

組織の中核としてキャリア教育推進を促していく存在が必要であると考えた。そこで、学校評価体制である4つの推進委員会に「キャリア教育推進委員会」を新設することを考えた。キャリア教育の視点を全教育活動に活かしていくためには、キャリア教育を通した目指す子どもの姿を明確にしていかなければならない。さらに、その姿が実現されるような方向性が一貫した取組を行う組織体制ではなければならない。校長教頭とともに検討を繰り返し、以下のような新たな組織体制の改善を図った。

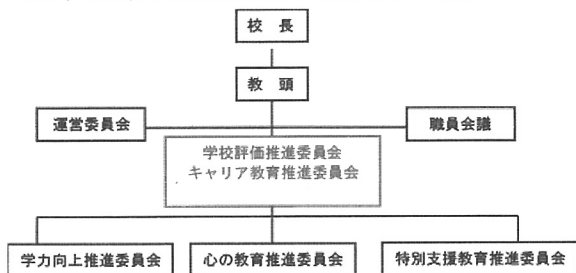


図2 平成30年度学校組織

「学校評価推進委員会」(◎第二教頭◎教務◎キャリア教育主任、知・徳・特支推進委員会のリーダーで構成される)をキャリア教育推進委員会と兼ねる組織として位置づけた。この組織体制のよさは、キャリア教育推進委員会が柱となる教育活動の方向性を示し、3つの推進委員会がそれぞれの分野における取組を計画実践することでより教育活動全体へとキャリア教育推進を広げていくことができる点である。

2) キャリア教育全体計画における達成目標

キャリア教育全体計画はキャリア教育を推進していく上でよりどころとなるものである。従来の全体計画では、各学年における基礎的・汎用的能力を身につけた目指す子どもの姿が明確ではなかった。そこで、「各学年における基礎的・汎用的能力のルーブリック(目指す子どもの姿)」について自校化したものを位置づけることとした。作成に際し、以下のことに留意した。

①イメージしやすい言葉

4つの基礎的・汎用的能力を「関わる力」「見つめる力」「やりとげる力」「向かう力」とした。

②能力の系統性

各学年における4つの能力の目標を3観点ずつ設定した。マトリックスとして整理する際に、6年間で育む力として系統性を図りながら、段階的に能力を獲得していくことが捉えられるように表した。

③活動場面に即した具体的な姿

この目指す子どもの姿を基に、各学年で年間指導計画を見直す際、教育活動にキャリア教育を位置づけていくことをねらった。教育活動のどの場面において能力を育てていくかイメージしやすいように、具体的な子どもの姿で表した。

3) 教育ビジョンの改善

①柱となるキャリア教育

在籍校の学校経営方針において、今後キャリア教育に求められる力は未来を創造するための「創造力」だと捉えている。小学校段階において「発想力」が「創造力」へとつながっていく必要な力と捉えた。

学習や生活において新たなものを生み出す基礎としての「発想力」を小学校段階で養うことは未来の「創造力」につながっていくと考える。小学校段階では発想したことを実現する力が伴っていないこともある。子どもがチャレンジすることは認め、思うようにいかないとき、新たな課題としてどうしていくべきかを考えさせる。そして、その繰り返しの中で自己実現を果たしたり、自らの将来を考えながら夢をもったりしていくことが「創造力」につながるのではないだろうか。以上のことから、教育ビジョンの大きな柱として「未来を創造し、夢を実現する力を育むキャリア教育の推進」を位置付けることとした。

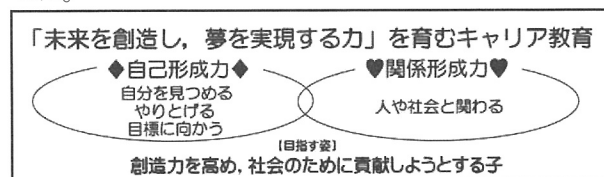


図3 教育ビジョンにおけるキャリア教育

②学力向上推進委員会におけるキャリア教育

学習活動を通して、児童に「自己形成力」を育む1つの場として、学習課題に対して、主体的に問題解決に取り組む過程が挙げられる。具体的には、「課題を自らの力で解決したい」「この方法で追究していけば解決できそうだ」という課題解決に対する意欲が高まることで「自己形成力」が高まっている姿と考えることができる。

一方、「関係形成力」に関しては問題を解決する過程で学習者同士が協働的・対話的に追究することで獲得することが期待される。

評価には児童の振り返りを活用する。振り返りによる児童の記述から「自己形成力」や「関係形成力」の獲得を評価することができる。

以上のことを踏まえつつ、学習過程において「自己形成力」「関係形成力」を養う場面と、その場面で期待される子どもの姿を明らかにすることを教科学習におけるキャリア教育の推進とした。

③心の教育推進委員会におけるキャリア教育

心の教育推進委員会では、学級活動を中心としたキャリア教育の推進を検討した。今まで行われていた「学級力アンケート」を活用し、アンケート結果を受けた学級会議を行うことを通して、子どもに「自己形成力」と「関係形成力」を育むことを考えた。学級力アンケートの実施及び学級での結果の活用について、計画を立て直し、心の教育推進委員会の取組として教育ビジョンに位置付けた。

④特別支援教育推進委員会におけるキャリア教育

特別支援教育推進委員会では、UDL（学習のユニバーサルデザイン）と学級における基礎的環境整備について着目した取組を構想した。どちらにおいても特別な支援を要する児童を含めたすべての児童に対して、見通しをもって主体的に学習に参加することに有効な手立てである。学年において児童の実態に応じたUDLの観点について設定をするとともに、教室の環境を整えていく。このことは、キャリア教育を行う学級という場が、児童にとってより学びに対して主体的に臨む「自己形成力」を培う場となることにつながるとともに、他者との関わりを促す「関係形成力」を培うことにつながっていく。

以上のことから、今年の特別支援教育推進委員会の取組をUDLや基礎的環境整備に関する職員の共通理解を図るとともに実践を行っていくことを教育ビジョンに位置付けた。

3. 職員の意識の向上に向けた取組

職員の意識向上に向けて、キャリア教育の視点を活かす場と方法、目指す子どもの姿を明確にしているために、以下の取り組みを行った。

1) 教育活動の価値付け

職員の意識向上を図るための手立てとして、現在行われている教育活動をキャリア教育の視点で捉えたときにどのような意味があるのかを価値付けていくことを考えた。

現在行われている教育活動で得られる子どものキャリア発達を明確にすることで、キャリア発達を得た児童の姿が明確になり、現在の教育活動がキャリア教育の視点を活かしていたことを認識することができる。しかし、今後キャリア教育の視点を活かし

た新たな教育活動を構想していくことにはつながっていない。キャリア教育で目指すべき子どもの姿を理解しても、どのような教育活動の場においてキャリア教育を推進していくかが明確になっていないからである。

そこで、学習指導要領で求められる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力とキャリア教育における基礎的・汎用的能力の關係に着目をした。

具体的なモデルとして、総合的な学習の時間と生活科の学習において、単元ごとに児童に身につけさせる三つの資質・能力と基礎的・汎用的能力との關係をマトリクスで表すことを試みた。

表1 3つの資質・能力とキャリア教育における基礎的・汎用的能力（5年総合的な学習の時間）

A：社会科で、「農業のさかんな地域をたずねて」を学習する。その中で稲作のさかんな地域について学習し、米作りの一年間の主な作業について、理解していく。			
自己形成力	社会科の農業についての学びを通して、その方法や問題点、疑問点などから調べてみたいことなどをもとに課題を設定することができる。	A1	
	調べ学習において、様々な情報から自分に必要なものを取捨選択や分析をしながら活用することができる。	A2	
B：地域の農家の方から教わりながら、学校田で稲作体験をする。			
自己形成能力	自らの課題解決に向けてよりよい調査方法を考えたり、まとめ方を工夫したりするなど、粘り強く活動することができる。	B1	
	学校田での米作り体験を通して、収穫の喜びと、生産者の苦労や工夫・思いについて知ることができる。	B2	
関係形成能力	農家の方と対話をする中で働くことに対する思いに気づくことができる。	B3	
	インタビュー活動や稲作体験から得たことをまとめ、分かったことを発表することができる。	B4	
C：「これからの食料生産」で学習したことをもとに食についての課題を設定し調べ学習を行う。			
自己形成力	社会科「これからの食料生産」の学びを通して、自らの食生活と結びつけて考え、課題を設定することができる。	C1	
	友達の考えを聞き、自分の考えとの共通点、差異点を見つけながら学習することができる。	C2	
関係形成力	友達と話し合ったり、探究過程でかわる方々に積極的に聞いたりと、課題解決することができる。	C3	
D：一年の学びや気付きを保護者や地域の方に発信する。			
自己形成力	学習を通して、これからの食料生産についての自分の考えをまとめたり、自らできることについて考えたりすることができる。	D1	
	学習を通して分かったことについて、聞き手を意識しながら、より効果的な方法を選択し発信することができる。	D2	
関係形成力	学習を通して分かったことや考えたことについて、学習でお世話になった方やおうちの方に分かりやすく伝えることができる。	D3	
	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
人間関係形成・社会形成能力	B3 D3		C3
自己理解・自己管理能力	D1		C2
課題対応能力	A2	A1 B4 C1 D2	B1
キャリアプランニング能力	B2	D1	

この教育活動の価値付けは、職員にとって指導要領改定に伴い各種年間指導計画を作成する際に、キャリア教育を推進する場を設定していくためのモデルとなった。

2) 教育計画におけるキャリア教育の位置づけ

教育計画作成が教育活動におけるキャリア教育の位置づけの場として最も重要であると捉え、キャリア教育推進部を中心に計画をし、提案を行った。

具体的には、まず、現行の各種教育全体計画においてキャリア教育全体計画で示した基礎的・汎用的

能力の達成基準と照らし合わせる。そして、児童が「自己形成力」や「関係形成力」を身につけていくために有効である教育活動への価値付けを行なうこととした。現在計画に伴い行われている教育活動において、価値付けを行っていくことで、キャリア教育を推進していく場が明確になり実践に向けての職員の意識の向上につながると考えた。

この各種全体計画へのキャリア教育の位置付けに基づいて、各学級担任が学級における教育活動において学級で行う具体的な活動を構想し、実践へつなげていく。その実践の成果と課題をキャリア教育推進委員会で集約し、職員全体にフィードバックすることで、次年度の各種教育全体計画の見直しにつなげていく PDCA サイクルを確立していくことを今後は目指していく。

3) 学年経営案におけるキャリア教育の位置付け

学年経営方針は各推進委員会が教育ビジョンで打ち出した達成目標及び実践事項を受け、学年の実態に合わせて教育活動の重点や目指す子どもの姿を設定するものとして存在している。教育ビジョンにおいて4つの推進委員会が示した児童に身につける

「自己形成力」及び「関係形成力」の達成目標及び実践事項を受け、学年経営案においても4つの推進委員会に関わる教育活動を学年の職員で協働的に計画することを提案した。また、学年における教育活動を通して「自己形成力」及び「関係形成力」を身につけた子どもの姿を明確にし、前期末と後期末の年間2回学年ごとに取組を振り返るとともに成果と課題について話し合い、学年の教育活動の改善につなげる場を設定した。

4. 成果と課題

1) 児童アンケートからみられる成果

【自己形成力に関わる項目】

- ・学習に主体的に取り組む……………95.1%
- ・めあてをもって取り組む……………90.8%
- ・学級をよりよくするために取り組む……………90.3%

【関係形成力に関わる項目】

- ・友達と考えを交流させる活動がすき……………90.2%
- ・縦割り班で協力して活動する……………94.7%

これらの児童のキャリア発達は、キャリア教育を推進していくための組織の構築と体系的な取り組みの成果であると考えられる。

2) 職員アンケートから見られる成果

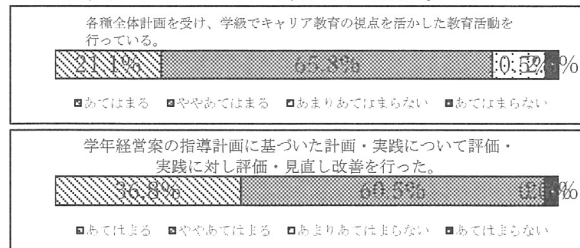


図4 キャリア教育推進に関する職員アンケート

キャリア教育の視点を各種全体計画に位置付けたことにより、これまでの教育活動において身に付けさせたい力と、「自己形成力」「関係形成力」との関連を意識して教育活動を推進することにつながった。

教育ビジョンや各種全体計画を受け、学年経営案に「自己形成力」「関係形成力」を身につけた目指す児童の姿を設定したことは、各クラスにおいて、児童の実態に応じたキャリア教育の実践へとつながった。

3) 課題と今後の取組の方向性

キャリア教育の視点を活かした教育活動を推進することで、教育活動全体で様々な取り組みへとキャリア教育の視点が広がった反面、キャリア教育を推進しているという実感が希薄になってしまった。今後も、在籍校のキャリア教育はあくまで全ての教育活動の中で行っていくものの、「自己形成力」「関係形成力」を育成する教科・領域や目指す子どもの姿の焦点化を図っていくことで、次年度以降のキャリア教育推進の方向性を明確にしていく。

5. おわりに

どの学校においても教育理念は存在する。その教育理念を職員が共通理解することとはどういうことだろうか。自らはこの研究を通し、理念の実現に向けた組織体制の整備、職員個々の実践の場の保証、成果と課題の検証があつてこそ、職員一人一人の実感の伴った共通理解につながることを学んだ。自らが取り組んできたことは、在籍校において、今後キャリア教育推進校となるための第一歩であったと感じている。多様な専門性をもった職員が行う様々な実践をキャリア教育の視点という一つの共通項を窓口、教育活動をよりよいものにしていくと関わる日々は、チーム学校としての強化にもつながったと感じている。今後も、学校組織の一員としてより一層のキャリア教育推進に向け研鑽を重ねていきたい。